

2016年1月23日(土) 第3回「小美玉チャペル 映画カフェ」上映作品

「サウンド・オブ・ミュージック SOUND OF MUSIC 1965年製作 174分」の見どころ

上映前

●監督: ロバート・ワイズ

●音楽: リチャード・ロジャーズ/オスカー・ハマースタイン(二人の最後の作品)

●出演:

マリア: ジュリー・アンドルーズ

ゲオルク・トラップ男爵: クリストファー・プラマー

エルザ: エレノア・パーカー (2013年、91歳で逝去)

●原作⇒舞台⇒映画

① オーストリア出身のマリア・フォン・トラップ(2014年、99歳で逝去)による自叙伝『トラップ・ファミリー合唱団物語』(The Story of the Trapp Family Singers)を基にしている。

② リチャード・ロジャーズとオスカー・ハマースタイン二世の名コンビが1959年11月にブロードウェイで初演。

③ 1965年に映画化し、世界的に大ヒットした。

●受賞:

この映画は第38回アカデミー賞で作品賞、監督賞(ロバート・ワイズ)、編集賞(ウィリアム・H・レノルズ)、編曲賞(アーウィーン・コスタル)、録音賞(ジェイムズ・P・コーコランとフレッド・ハインズ)の5部門を獲得。(主演女優賞ミネート)

●エピソード:

① 当時20世紀フォックス社は、巨費と歳月をかけた超大作『クレオパトラ』の失敗で倒産もささやかれていたが、この映画の空前の大成功により経営を立て直すことができ

た。収入はアメリカだけでも7900万ドル、これは当時の配給収入記録の最高額である。

2010年12月、製作45周年記念して、HDニューマスター版:ブルーレイ・コレクターズBOX(数量限定生産)が発売された。なお、HDニューマスター版:ブルーレイ盤はDVD盤同様に、正規レンタルも行われている。

② ミア・ファロー、リチャード・ドレイファス、カート・ラッセルなどがトラップ大佐の子供役でオーディションを受けたが落選している。また、マリア役にグレイス・ケリーやドリス・デイなどの名前が挙がっていたが、監督は「メリー・ポピンズ」がまだ公開される前で無名のジュリー・アンドルーズを選んだ。

③ カメオ出演: ジュリー・アンドルーズがトラップ邸を初めて訪れる直前に『自信を持って』を唄いながら街を歩く場面で、原作者のマリア・フォン・トラップ本人と娘、孫娘がワンシーンだけ通行人として映画に出演している。(彼女がドームと邸宅をつなぐアーチをくぐるショット。後ろで民族衣装の女性3人が左から右に歩く。それがトラップ夫人と娘ロースマリー、孫娘バーバラ。)

④ 小美玉チャペルの優れた映写設備。(大型スクリーン、音響、高級日よけカーテン(40万円)、感謝)

上映後

●私のエピソード:

①「百万人の福音」に、「聖書メガネで映画を見れば」が連載されていて、こちら(小美玉チャペル)で上映した「ユーガットメール」や「野のユリ」も載せたが、この1月号には、

「サウンド・オブ・ミュージック」を。

② ワーナー映画で、ケヴィン・コスナー主演の「ポストマン」があった。約 1 世紀後の未来のアメリカ。核戦争で人類のほとんどがなくなり、生き残った人々は昔の素朴な時代の生活様式に戻り、通信も手紙になって、ポストマン(郵便配達人)によって配られる。決して逃亡できない断崖絶壁に造られた凶悪な囚人たちの刑務所が登場し、彼らの娯楽のために、岩に掲げた巨大スクリーンに、いわば 1 世紀後にも残る代表的娯楽映画として上映されたのが、この「サウンド・オブ・ミュージック」。

③ 1982 年にヨーロッパ旅行をした時、ウィーン、ザルツブルクも訪れ、この映画のロケ地をバスでたどった。トラップ邸に使われた大邸宅、二人が結婚した教会(中に入った)、冒頭シーンの丘陵など。感無量だった。

●この映画の見どころ 3つ:

① 音楽: これぞミュージカル! —音楽のすばらしさ。

ゲオルク: 第 1 部の最後で、家族とともに「サウンド・オブ・ミュージック」を歌い、子どもたちと抱き合い、マリアに、「君はこの家に音楽をよみがえらせてくれた。」

冒頭、上空からの俯瞰で、覆われた白い雲の切れ目から、オーストリア・ザルツブルクの丘陵がはるか下に見えます。その丘に立ち、両手を広げて舞うように歌いだす女性は、この映画の主人公で修道女のマリア(ジュリー・アンドリュース)歌はご存じ「サウンド・オブ・ミュージック」。

このテーマソングに続いて、次々と映画を流れる楽しい曲の数々は、「オクラホマ」「回転木馬」「南太平洋」「王様と私」などで一世を風靡し、この作品が最後になったリチャード・ロジャーズとオスカー・ハマースタインの作曲作詞コンビの手による「ドレミの歌」「エーデルワイス」、最後の「すべての山に登れ」など十数曲。数あるミュージカル映画の中で、これほど老弱男女、誰にも親しまれる歌が流れた映画は他にない。では、その

曲を振り返ってみよう。

●ストーリーと歌:

【第 1 部】

オーストリアのザルツブルク。1938 年のドイツによるオーストリア併合及び第二次世界大戦の前夜(ヒトラー率いるナチス・ドイツは翌 1939 年、自分の祖国でもある隣国オーストリアに侵入、第 2 次世界大戦が始まる)。映画の冒頭にマリア(ジュリー・アンドリュース)が山々に囲まれた緑の大地の上で歌い踊る《歌: サウンド・オブ・ミュージック》[1]。出演者などの字幕の最後に「オーストリア 1930 年代 最後の黄金の日々」という字幕が出る。

マリアは修道女見習い。お転婆で周囲の修道女にからかわれていた《歌: マリア》[2]。ある日、修道院長に、トラップ大佐の 7 人の子供たちの家庭教師をするように勧められ、トラップ邸へ向かう《歌: 自信を持って》[3]。

ゲオルク・フォン・トラップ大佐(クリストファー・プラマー)はオーストリア=ハンガリー帝国海軍の退役軍人で数年前に妻を亡くして以来、子供たちの家庭教師がどれも長続きせず困っていた。ゲオルクは、子供たちを軍隊のように厳しくしつけているが、子供たちは至って快活。早速カエルをマリアのポケットに忍ばせていたずらをする。

夕食。子供たちのいたずらで席に置かれた松かさの上に知らずに座ったマリアは悲鳴をあげるが、父ゲオルクには「持病のリウマチの発作で」とごまかし、子供たちに朗らかに「歓迎の意」のお礼を述べる。

やがてゲオルクに電報が届き、翌日からウィーンに出かけることになる。長女リーズル(シャーマン・カー)は電報配達のリルフとひそかな恋仲であり、夕食途中で席を立ちリルフに会いに行く。二人は互いの愛を確かめ合い、甘いひとときを過ごす《歌: もうすぐ 17 歳》[4]。だが、時間が過ぎて閉門の時刻を忘れてしまい家から締め出されたリーズルは、マリアの部屋の窓からそっと入ってきた。外は雷鳴が音高くとどろき、雷を怖が

る弟や妹たちも次々にマリアの部屋に集まってきた。雷鳴と雷光におびえる子供たちにマリアは、「哀しい時、つらい時は楽しいことを考えましょう」と教える《歌:私のお気に入り》[5]。すっかり打ち解けたマリアと子供たちだったが、就寝時間を守らなかったことで父ゲオルクにたしなめられる。

マリアは海軍の制服のような子供たちの衣服をかわいそうに思い、部屋のカーテンで遊び着を作って山に遠足に出かける。子供たちがいたずらや悪さをするのは父ゲオルクの気を引きたいからだと聞かされたマリアは、歌を歌って気を引いてはどうかと提案するが、母を亡くしてから長く家で音楽を奏でることがなかったため、皆が知っている歌がひとつもないと聞いて驚く。そこでマリアは子供たちに歌を基礎の基礎、ドレミの階名から教える《歌:ドレミの歌》[6]。(特に有名。この映画を知らない人にも。)

数日してマリアと子供たちが川遊びをしているところに、ゲオルクが婚約者のエルザ・シュレーダー(エレノア・パーカー)と友人マックス・デトワイラーを連れて戻る。奇妙な遊び着を着ていることでゲオルクは激昂するが、マリアは子供たちに目を向けて欲しい、寂しさに応じてあげて欲しいと必死で訴える。取りつく島もなくゲオルクはマリアに解雇を言い渡すが、子供たちの合唱する声に吸い寄せられ、自らも長い間忘れていた歌を歌う《歌:サウンド・オブ・ミュージック》。自分の教育方針は独りよがりだったとゲオルクは詫び、マリアは引き続き家庭教師としてトラップ邸に留まるよう依頼される。

マリアと子供たちはエルザとマックスを歓迎する会を開く。その歌のすばらしさと人形劇の面白さにゲオルクは大喜びする《歌:ひとりぼっちの羊飼い》[7]。マックスは子供たちを合唱団として売り込むことを提案するが、ゲオルクは一笑に付す。そこでマリアはゲオルクに「次はあなたの番」とギターを差し出す。ゲオルクは照れて拒むが、子供たちに押し切られる形でギターを受け取り、昔を懐かしむかのように情感をこめて《歌:エーデルワイス》[8]を歌い上げる。(小美玉の有線放送で使用。)

エルザの提案でトラップ邸で舞踏会が開かれた。楽団がワルツを演奏して参加した

人々がダンスを踊り、テラスでは子供たちとワルツに興じるマリアであったが、やがてオーストリアの民族舞踊レントラーの曲に変わると、ゲオルクが現れてマリアと踊りだし、二人の目が合うと、マリアは「これ以上はもう忘れた」と言って踊りをやめるが、顔を赤くして立ち尽くしてしまう。二人の間に愛が生まれつつあることに気づいたのだ。部屋に戻る子供たちが歌う《歌:さようなら、ごきげんよう》[9]。出席者の中に地元の指導者ゼラーがいて、オーストリア国旗を掲げるゲオルクに国旗を降ろしドイツ国旗に変えるように忠告するが、ゲオルクは逆に彼を非難する。一方マックスはマリアがパーティーの食事に参加するよう提案し、ゲオルクも了承する。着替えのために2階に上がったマリアにエルザが、ゲオルクがマリアに気があるのではないかと伝える。エルザはゲオルクとマリアが互いにそれと気づかず惹かれあっていると感じており、二人の仲が進むのを危惧していた。「ゲオルクの気持ちを本気にするな」と言うエルザの言葉に、これ以上トラップ邸にいられないと思ったマリアは置き手紙をしてそと修道院に戻る。

【第2部】

突然のマリアとの別れを寂しがると子供たちは修道院にマリアを訪ねるが、会えずに戻る事となる。マリアは部屋に閉じこもったままで、修道院長に懺悔し、罪を犯した自分は一生神に仕えろと訴えるが、逆に院長から神の愛も男女の愛も同じだ、向き合っただの道を見つけなさいと諭される「全ての山に登れ、全ての道を歩き、全ての虹を渡れ、自分の夢を見つけるまで、生きている限り愛を注げる夢を見つけるまで」《歌:全ての山に登れ》[10]。やがてトラップ邸にマリアは戻る。修道院へ行っていたため昼食に遅れた子供たちは父親に叱責され、歌を歌って元気を出そうと歌っていると《歌:私のお気に入り》、重なるようにマリアの歌声が聞こえた。

その晩、バルコニーで結婚を語り合うゲオルクとエルザだが、ゲオルクの目は夜の庭をそぞろ歩くマリアの後ろ姿を追っていた。ゲオルクはすでに自分の心がマリアに向っていることに気づき、エルザに婚約解消を告げる。ゲオルクとマリアは、邸宅の庭で互

いの愛を告白する《歌:何かいいこと》[11 完]。

二人は教会で子供たちや修道女たちに祝福されて結婚式を挙げ《歌:マリア》、新婚旅行に出かける。

二人が新婚旅行に行っている間に、オーストリア併合に伴い進駐してきたドイツ軍がザルツブルクにも駐屯していた。コンクールが行われる日、練習を終えて出てきたリーズルがロルフを見かけたが、彼はリーズルにゲオルク宛ての電報を託し、リーズルに対しどこか冷たくなっていた。ロルフはオーストリア・ナチス党の親衛隊員になっており、ナチス式敬礼をした上に、ゲオルクもドイツ軍人としての任務に就くよう忠告する。一方、この日、母国の不穏な雰囲気を感じて急いで新婚旅行から戻ったゲオルクの家には、今やドイツのみならずオーストリアの国旗となったハーケンクロイツ(カギ十字)旗が掲げられており、激昂したゲオルクはその旗を引きずりおろす。また、マックスは子供たちを合唱団として売り込む事を諦めておらず、ゲオルクが居ない間にコンクールへの出場を決めてしまっていたが、ゲオルクはなおも反対した。リーズルから渡された電報は、有能な軍人であったゲオルクに対するドイツ海軍からの出頭命令であった。《もうすぐ 17 歳》愛国者でありドイツのオーストリア併合に反対するゲオルクは、ドイツ軍の言うとおりに出頭する気はなく、時代の大きな波を感じとり、中立国であるスイスへ一家で亡命することを決意する。

その晩、トラップ一家が亡命するために屋敷を出ると、今やドイツ第三帝国の官吏となった(元のオーストリア人)ゼラーが待っていた。実はトラップ邸の執事でオーストリア・ナチス党員のフランツが、亡命の計画を密告していたのである。ゼラーは出頭命令のもと、ゲオルクを新たな任務先へ護送しようとするが、ゲオルクは自身が反対していたコンクールを口実にし、ゼラーはコンクールが終わり次第護送するという条件を出して、護送の延長を許した。親衛隊の厳重な監視のもと、ザルツブルクの祝祭劇場で行われたコンクールで《歌:ドレミの歌ほか》と、《歌:エーデルワイス》、そして《歌:さようなら、

ごきげんよう》を歌って2~3人ずつ舞台から消えていく。審査の結果が3位、2位と発表されて最後に優勝としてトラップ一家が発表されるが舞台に現れず、その表彰式の隙にトラップ一家は劇場から逃げ出していた。

一家はマリアのいた修道院に逃げ込むが、修道院長から国境が閉じられたことが伝えられ、ゲオルクは山を越えることを決意する。やがて親衛隊が修道院に到着し、車を入りに置いて修道院内を搜索する。その中にはロルフもあり、一家が墓場に潜んでいることに気づいたロルフは銃を構えるが、リーズルとゲオルクに声をかけられ一瞬躊躇する。同行するよう説得するゲオルクに反発したロルフは大声をあげ上官に通報するが、一家は裏口から車で逃走する。親衛隊も追跡しようと止めていた車で発車しようとしたがエンジンがかからず、トラップ一家を取り逃がしてしまう。直後に修道院長に対し罪を犯したと告白する修道女たちの手には、そのエンジンから外した部品が握られていた。

国境線が全て閉鎖されているため、トラップ一家は徒歩で山を越えて逃亡先のスイスへと向かう《歌:全ての山に登れ》。

*この音楽が、家族のきずなをよみがえらせ、マリアと7人の子どもたちと、夫ゲオルクの心をついにし、やがて渡米してからの彼らの生活を支え、世界中の人々に生きる希望を与えた。(「天使にラブソングを」もそう。)

② 信仰: 厳しい現実の中で生きて働く信仰

●信仰とは、神を信じ、その最善のみ心を信じ、従うこと。

×頭の中だけ、観念的、知識だけ

*このマリアを育てたのは、修道院長。ゲオルクに恋した自分を恥じて修道院に戻ったマリアに、決して律法的に、彼女の男性への愛の感情を否定したり、叱ったりせず、「神への愛も男女の愛も同じです。臆せず自分の道を進みなさい」と諭した彼女の信仰的卓見。

*日頃その院長の修練を受けていた二人の修道女は、ラストで、国を脱出するトラップ一家を追うナチスの車のエンジン発火コイルを抜き取り、「罪を犯しました」と院長の前に差し出します。人命のためなら罪をも辞さない、危機の中でとっさに働くこの信仰理解こそ、真に自由人とされた信仰者の在り方を示す、見事なエピソードであり、イエスが安息日の禁を犯しても病人を癒やしたことに通じる。(ルカ14:1-6)

*この院長にして、このマリアあり、この修道女たちあり。

*彼女たちにこの信仰を働かせた根底にあるのは、「愛」、神への愛と、人への愛。

③ 愛: 愛こそ全てを結ぶもの

【口語訳】(コロサイ 3:14) これらいつさいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。

A. “愛”は音楽を結ぶ(音楽と共に働く):

*オーストリア出身のマリア・フォン・トラップ(2014年、99歳で逝去)の自叙伝「トラップ・ファミリー合唱団物語」を基にしたこの映画は、1938年のナチス・ドイツによるオーストリア併合という、第二次世界大戦前夜の重苦しい時代背景を吹き飛ばすように、楽しく、心温まる作品に仕上がっているが、その源は、マリアの誠実な神信仰からあふれ出る、子どもたちへの、そしてやがて夫となるゲオルク・トラップ男爵(クリストファー・ブラマー)への“愛”。この映画のすべての“^{サウンド・オブ・ミュージック}音楽の響き(調べ)”(タイトル)の背後には、神から注がれる愛がある。

B. 愛は信仰の実を結ぶ:

本当の信仰とは、愛から出て、愛と結びついて働くもの。

(ガラテヤ) 5:6 キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けない(ただやみくもに規則を守ること)は大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。

5:13 兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉(注:様々な欲望)の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。

5:14 律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。

●音楽と、信仰と、愛。⇒この映画を不朽の名作に。

⇒皆さんの日常生活をもよみがえらせる力に。